

---

# また会いましょう

望月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

また会いましょう

### 【Nコード】

N6201A

### 【作者名】

望月

### 【あらすじ】

高校2年生の夏、僕のクラスに転校生がやってきた。転校生は昔のクラスメイト。懐かしい記憶が僕の胸を締め付ける・・・

また会いましょう

## 上：日常という幻想（前書き）

誤字脱字があるかもしれません、ご了承ください。感想をもの凄く募集しています。

また会いましょう

## 上：日常という幻想

いつもどおりの学校、いつもどおりの日常。なのに、どこか浮き足立った雰囲気は僕のクラスに漂っている。

今日、僕のクラスに転校生が来るらしい。

みんなが転校生はどんな人なのか、男か女か、期待を胸に朝のHRを待ち焦がれている。

僕はいえ、そんなクラスを傍目に自分の席に座りながら窓から空を見上げているだけだった。

僕の席は窓際が一番後ろ、空を眺めるには静かで絶好のポイント。今のうちから期待するのが面倒くさいというのと、僕自身も何度か転校した経験があるので、いまさら興味が湧かないという2つの理由から今は少しだけクラスから浮いていた。

自己弁護をするのなら、僕は低血圧ではないにしろ朝は強くは無く、朝はあまり高いテンションまで上がらないのだ。

「ちくつす、起きてるか、那谷？」

今呼ばれた「夕木 那谷」、それが僕の名前だ。普通が取り柄な高校生2年。

回想に入るが、僕は今から3年前にこの土地に引越してきた。そういえば、転校当初は精神的にきつかったけなあ……。

そんなことを考えながら雲を視線で追っていると、後ろから声をかけられた。

「あ……将か。おはよう」

振り返ったところには、ちょうど今来たのか上着を着たままの友人「坂木 将」が立っていた。

「眠たそうだな、どうせパソコンでもやってたんだろ」

「ピンポン、大正解。豪華商品は僕からの冷たい態度です。失せろバカ」

「ラッキー。でも豪華すぎて俺にはもつたないから、人形を相手

また会いましょう

また会いましょう

に同じ事を言っただけで痛い人間として周囲に見られる」

まあ……これも日常だ。僕はあくびを噛み殺しながら、大きく体を伸ばした。

「マジで眠そうだな、何？萌え系でもやってたの？」

「燃えてる、主にお前の家のお前の部屋だけ」

「言葉の暴力だぞ、いわゆるイジメ？」

「イジメじゃないよ、嫌がらせ。っで、なんか用？」

将は僕の隣の席に勝手に座り、机に肘を乗つけて大きなあくびをした。

「ん〜、なんか何処行っても転校生の話ばっかだからさ。面白くないだつて、ひ〜ま〜」

まるで子供が、わがママを言うように将は大きく伸びながら唇を尖らせる。さすがに、僕は呆れた。

「それで？」

「別にそれだけ」

「あっそ」

僕は再び窓の外へ視線を戻した。

「冷たい〜。そんなんじゃない俺は萌えないぞ〜？」

「あはは、黙れ。そして死ぬ、35回ぐらい」

「具体的な数字まで！しかも多っ！！」

そんな将の言葉を見無視して携帯電話の時計を見れば、8時30分を少し過ぎていてHRが始まる時間だった。

「ほら、先生来るぞ？そして後ろで席の主が待ってる」

将は後ろを見ると席の子に一言、『ごめん』と言って自分の席に戻っていった。

窓の外では雲が流れて行く。ゆっくりと形を変えながら、どんどん流れて行く。

ガラガラッとドアが開いた音がしたので、おそらく先生が来たのだろう。それでもなお、喧騒は止まない。

「HR始めるぞ、全員静かに席に着け」

先生の一言で、クラスの喧騒は落ち着きへと変わっていった。  
「あゝ、既に知ってるとは思いが転校生が1人来ることになってい  
る」

そういうと、再びドアのガラガラという音が聞こえた。そこで、  
ようやく僕は空から視線を教室の中へと移した。

そして不甲斐ないことに、転校生と目が合った瞬間に固まってし  
まった。

「あー!!」

叫ばれた、教室中が震えると言う表現が正しいと思えるほどに。

「なんだ、どうかしたのか!？」

「えっ? あっ、いいえ。何でもありません」

驚いている先生に、転校生は少しだけ引きつった笑顔で答えた。

明らかに、さっきのは僕を見て叫んでいた。そして、僕も彼女を見  
て叫びかけた。

因果、運命、なんとも不吉で嫌な響きである。本日のテンション  
はライブドア株並みの大暴落。

なんだろう、これが僕と彼女の再会の瞬間だった。

「始めまして、「水無 海璃」です。新参者ですが、よろしくお願  
いします」

当たり障りの自己紹介が終わった。

「そうだなあ、席は場所が無いから……、夕木の後ろで良いか」  
まじっすか!!

「それじゃあ、授業始めるぞ。夕木、水無さんは転校してきたばっ  
かりだから色々教えてやれよ」

まじっすか……!!

「はい……」

「よろしくね、夕木君」

席に着いた水無さんは、笑顔を顔に貼り付けながら僕に言った。  
その笑顔を見た瞬間、昔に戻った感覚に陥り胸が軋んで痛んだ。

「ああ……よろしく」

僕は軽く返事を返し、窓の外へと視線を逃がした。日常は音を立てて崩壊していく、ほんとに勘弁して欲しいくらいバラバラに。

僕は彼女を知っている。

彼女も僕を知っている。

元クラスメイト、そして現クラスメイト。そう、彼女とはこっちに引越すまで同じ学校に通っていた。

クラスメイトで友人、知人にして……元恋人。

空はやはり青いままだ、当然である。先ほどから1時間もまだ経ってはいないのだ、天候がそれほど早く変わるはずも無い。

「よりによって、海璃が転校してくるかよ……」

もちろん本人が後ろに座っているので、声には出さない。僕たちは、昔付き合っていた。僕が転校する2年前から、僕が転校する前日まで。

どっちが振るとかじゃなく、自然と別れるという結果になった。遠距離恋愛なんて、無理だ。それが2人の意見であり、現実だった。

1時間目が始まって、およそ10分が経過中。全然授業に集中できぬまま、僕は空を横目で眺めている。

田舎独特の遮る物の無い、高い空。

僕の後ろに昔のクラスメイトで恋人だった人が居る。

なぜ僕はこんなにドキドキしているのか、なぜ僕はこんなに落ち着かないのか。

決まっている、日常が壊れたから。夢が現実となったから。

僕は……まだ海璃のことが好きなのだろう。4年も経った今でも……昔同様に。

粹なことをしてくれる神様も居たものだ、感謝するから死んで欲しい。

「夕木君か……残酷だなあ。いや、僕が甘いのか？どっちにしる無常だよな、僕にとっては」

夕木君……か。何度も何度も、会いたいと思った。何度も何度も、

また会いましょう

電話をかけようと思った。

でも、その回数だけ僕は諦めた。僕たちは、もう恋人ではなくなっていた。

あえば、辛くなる。話せば、恋しくなる。

だから僕は諦めた、世界に惨めに敗北宣言をした。

どうして夢を見させてくれないんだろう、見続けることを許されないのだろう。

本当に、無常だよな。

また会いましょう

## 上：日常という幻想（後書き）

読んでくれてありがとうございます。私のHPは<http://tukiyonoutage.fc2web.com/>にあるので、ぜひいらっしてください。感想募集しています

「この作品」が気に入ったらクリックしてENTERを押し、投票してください。（月1回）

また会いましょう

## 中：懺悔の回想

1時間目終了のチャイムが校内に鳴り響いた。先生が出て行くのと同時に、教室は朝と同じ種類の喧騒に包まれた。

全員の目的地は僕の後ろ。水無海璃の元である。

「ねえねえ、海璃ちゃんってさ何処に住んだの？」

「えっと、苦小牧のはずれの方に6年ぐらい住んだの」

「じゃあさ、兄弟とか居るの？」

「うん、弟と妹が1人ずつ居るよ。両方とも中学2年生」

あちこちから飛んでくる質問の嵐。僕は自分の席を離れて、それでもやはり窓際で空を眺める。

聞きたいことは沢山ある、言いたいことも沢山ある。でも、僕にはその資格があるのだろうかとも思う。

眺めている先で、雲が形を変えながら青い空を流れていく。

「変わらないわけ無い、現実だもんな」

4年が経って、僕たちは変わってしまったと思う。容姿も、性格も、考え方も、色々なものが。

僕は溜め息をついてみた、しかし胸の中の重たいものが出てくるとは無い。

「なに朝っぱらから、溜め息なんかついてんだよ。大体、空を見るんなら自分の席からで良いじゃねえか」

将は窓ぶちに背を預ける格好で、僕の隣にやってきた

「嫌味か？」

「嫌味だ。水無さんだっけ、知り合いなの？」

「さあ、どうだろう」

「そっか」

将は性格は破綻しているが、割と良いヤツである。

だから僕に『仲の良いヤツは？』と聞かれたら、悔しいけど、認

また会いましょう

めたくないけども、多分こいつの名前が出てくる。

相手が話したくないことは聞いてこない、相手が聞いて欲しいことは茶化さない。そして、こいつは他人の話を漏らすことをしない。だから信用している、信用できる。

「なあ、将」

「あん、なんだ？」

「世界は無常だと思わないか？」

「どうした？急に頭までも狂った？」

将は僕のほうを横目で見ながら、ごく自然な反応を返した。

「正確には狂いそう。っで、どう思う？」

僕たちの視線は交わらない。

「ああ、無常かもな。無常で残酷で、それでいて心地いいと思う。交わる必要はない。」

「そっか」

「お前は息苦しいと思うか？」

「どうだろう」

僕たちは、こういった会話をすることが多い。実にくだらない、無意味で不毛な会話。

「世界は確かに酷い、それは事実だと思う。でも、だからこそ俺たちには幸せがある。幸せを求めるんだと思う」

「何言ってるんだろうな、僕たち」

「まっただ」

そして、僕たちは会話を終えた。

横目で教室の片隅、海璃の方を横目で見た。

彼女は、昔と同じように笑っていた。彼女は昔と変わっていないように見える。

僕は変わってしまったのだろうか、僕が変わってしまったのだろうか。時は流れていく、人も流れていく。

でも、気持ちだけは流れていて欲しくないと僕は願った。

また会いましょう

午前中の授業は、チャイムと共に終わりを告げた。

僕は鞆から弁当を取り出すと、席を立った。目指すは夏の間だけ開放されている屋上だ。

僕が席を立つて少しすると、すぐにクラスの誰かが僕の席に座り円を作つて、海璃と一緒に弁当を食べ始めようとするのが見えた。

少しの間その光景を見ていると、海璃と目が合ってしまった。僕はその瞬間、すこし固まった。海璃も固まっていた。少しの間、僕たちは固まった。

ほんの一瞬の時間が経つて、彼女はようやくはにかんだ笑顔を僕に向けた。僕もはにかんだ笑顔を返してみたが、うまくいったかは分からない。そして、僕は逃げるように屋上へ向かった。

屋上の軋むドアを開けると、気持ちのいい風が体を撫でていく。「おう、遅かつたな」

屋上には既に先客が2人来ていた。1人は将、もう1人は将の彼女の「如月 凧」だ。

「お邪魔だったかな」

「はいはい、那谷君はいつもそのセリフ言うよね」

「まあ、良いんじゃないの？ 一種の挨拶だと思えば」

「なんだか久しぶりに日常に戻った気がした、日常万歳。」

「2人とも早いね、凧のほう4時間目なんだったの？」

「ん？ 私のほうは古典だったよ。っていうか、今日は単に那谷君が遅かつただけだよ」

「そうかなあ？」

「そうだよ。つて、そこ。バクバク弁当を食べるな！」

見れば、既に将は弁当をほぼ食べ終わっていた。僕はまだ弁当箱を開いてすら居ないのに……

「いや、だつて美味いからさ。ついつい食っちゃまうんだよ。毎日弁当サンキューな」

「そう思うんなら、もうちょっと味わつて食べてくれると嬉しいんだけどなあ」

また会いましょう

また会いましょう

将の弁当は風が作っているのだが、風の料理の腕はかなり高いので個人的にかなり羨ましい。

「そういえば、そっちのクラスに女子が転校してきたんだって？どんな子なの？」

「苦小牧のはずれから転校してきたって言ってたっけ。結構、可愛い子だよ」

「私よりも？」

「さあて、どうかな」

うん、いつもながら肩身が狭い。居心地は好いんだけど、恋人同士の間にいるのは肩身が狭くて仕方が無い。

「そういえば、苦小牧って那谷君も同じ様なこと言ってなかったっけ？」

「うん、言った」

「知り合いなの？その、え〜と・・・」

風は何かを言おうとして、口をパクパクさせている。

「水無さんって言ったっけ。水無海璃さん」

「その水無さんとは、知り合いなの？あつ、でも苦小牧ってここよりも都市だからね。そうそう知り合いつて事も都合よすぎるか」

その考え方は非常に正しい、でも世界は無常だった。

「知ってる、昔のクラスメイト」

「すっご〜い！偶然じゃん、もう話とか結構したんでしょ？」

「風、詮索はそのぐらいにしておけ」

将は最後の卵焼きを口に運びながら、目を輝かせている風をたしなめた。

「だって、凄い偶然じゃん。運命ってヤツだよ？あ〜、いいなあ。なんか、ロマンチックで」

「そうでもないけどね、会話もしてないし」

今日の弁当は全体的に味が濃いなど、どうでもいい事を考えながら風の質問に答える。

「え〜、なんで！〜もしかして・・・仲悪かったとか？」

また会いましょう

「凧、そのぐらいにしておけ」

「別にいいよ、そんな顔されたら言わなきゃ悪いし」

「悪いな・・・」

「うう、なんか無理に聞いちゃった？」

「まあ、無理矢理感は全身で感じるけどもね」

僕は弁当箱に箸をしまつて、軽く息を吐き覚悟を決めた。将は不安げにこちらを眺めてはいるが、これ以上留める気はないようだった。

「つで、聞きたいことは？」

「え〜つと、まずはなんで元クラスメイトなのに話したりしないの？」

「4年だよ？覚えてるかどうかもわかんないし・・・」

「嘘だな」

はい、嘘です。

「教室に入ってくるなり、お前を見て彼女は驚いていた」

「う〜ん・・・じゃあ、やっぱ仲が悪かったとか？」

「良かった、もの凄く」

良いなんてもんじゃなかった、悪かったらこんな苦しくは無い。

「じゃあ何で・・・」

「だからだよ」

「なる・・・ほどね」

「えっ、何々？どういうこと？」

納得したように眉をひそめる将と相変わらずな僕を、凧は交互に見つめた。

「悪かったな、野暮なこと聞いて」

「いえいえ、今度何か奢ってくれるならチャラでいいよ」

「ちょ・・・」

「凧、この話は終わり。ここまでだ、俺たちの立ち入る話じゃない。将にしては珍しく、凧に対してはつきりとした口調で言い放った。そこまで重く見られても困るけども、やはり嬉しい。」

「将がそういうんなら、諦めることだけでも・・・」

「ほら、チャイムが鳴るから教室に行こうぜ。那谷も弁当食い終わっただろ？」

将は、僕と凧にそういつて腰を上げた。そして、僕たち3人は自分たちの教室へと足を向けた。

「凧、最後の質問だけでも・・・」

僕は足を止めずに、凧に話しかけた。

「えっ、なに？」

「仲良かったよ、元恋人だもん」

「あっ・・・」

僕の視線はまっすぐ前を見たままで、凧の視線とは重ならない

「それじゃあ、またね」

僕と将は自分の教室に入っていった。

「いいのか？」

将は教室に入り、僕の前の席に座って話しかけてきた。後ろの席は、幸いにして空席になっていた。

「なにが？」

「凧に話して」

「僕は最低だね、最悪に残酷だよ。だから、振られたんだよ」

残酷だ、そして無常だ。世界が、そして僕自身が。

「残酷？」

「そう、残酷。僕は最後に、あんなことを言う必要はなかった。言えは凧は、聞き出してしまったことを後悔する。それを知っていて、知っていたからこそ僕は話した。最低だな、僕って」

中：懺悔の回想（後書き）

ありがとうございます、できれば最後まで読んでいってください  
「この作品」が気に入ったらクリックしてENTERを押し、投票  
してください。（月1回）

また会いましょう

下：再会そして未来へ（前書き）

最終話です

また会いましょう

## 下：再会そして未来へ

授業が終わって、どのくらい経っただろう。

放課後になってすぐに、僕は屋上へと足を運んだ。僕は屋上で、1人のんびりと仰向けに寝ている。

空の色は青から薄い紫に変わって、雲は相変わらず流れ続ける。結局あの後、将は僕に対して何も言わずに自分の席に立っていった。凧とも会わずじまいで、今に至る。

今日一日に色々重なりすぎて、頭の中が軽く痛む。

1人で空を眺めていると、その痛みが少し軽くなる気がする。多分、既に1時間ぐらいこうしている。

すると突然、頭の上からドアが開く音がした。体を起こして振り返ると、頭の痛みに加えて胸の一部が急速に痛み出して。

目の前に立っていたのは、痛みの原因である転校生の水無海璃だった。

「こんばんは、そして久しぶりかな？」

「こんばんは……、お久しぶり」

言葉が喉に引っかかり、うまく言葉になったか不安になった。

「私のこと覚えていてくれたんだね」

「うん、覚えていた」

どうして、ここに居ると分かったんだろう……

「坂木君と如月さんだっけ？放課後に話しかけられたんだ。ちょっと時間ありますかって」

それが自分に話しかけてるというのに、気付くのが一瞬遅れた。

「それでね、聞かれたんだ。私と那谷の関係について」

「それで？」

「喋ったよ、私たちが付き合っていたこと。私があなを振ったことも、私たちが他人を装ってるってことも」

「そっか」

また会いましょう

また会いましょう

淡々として表情が表に出ない自分に少し驚きながらも、それでも内心の動揺が気付かれないかと僕は心拍数を上げた。

「2人とも信じられないって顔と、やっぱりかって顔してた。那谷はもう2人に話してたの？」

「必要なことだけ」

「大事なところは？」

僕は黙り込んで、海璃の視線から逃れるように俯いた。

「どうして、私があなただを振ったのか。それは話してないんだ」

「別に、必要ないと思ったから」

「那谷は私のこと、まだ好き？」

僕は言葉を返せなかった、言葉を出すどころか呼吸すら困難だった。

お願いだから、それ以上聴きたくは無い。

「私は好きだよ、那谷のことを今でも」

「僕は……」

「やさしいね、残酷なぐらいに」

残酷と言われるたびに、自分で言うたびに胸が悲鳴を上げる。

「私のことが恐い？憎い？」

「いや……」

「そっか……」

海璃は軽く溜め息をついて、口を1度開いて、そして閉じた。海璃が言いたいことは分かる、そして僕はこれでも男である。言わなくてはいけないことは、自分できちんと言つことぐらいは出来る。

「好きだよ、今でも。愛してる、昔と変わらず」

「そっか」

「うん」

「隣、座つてもいい？」

「いいよ」

太陽は半分以上沈んでおり、空は紫から紺色へと変わっている。

部活が終わり帰り支度をする人達の声が、冷たい風に乗って僕たち

のところまでやってきた。

「那谷、あのね……」

「駄目だよ、それ以上言ったら。戻れなくなる、きつと後悔する。

夢は夢のまままで終わったほうが、綺麗なままだよ。夢を見続ければ傷つかなくてもいいんだから」

「夢を見るのはタダだよ、諦めるのもタダ。私にだってわかるよ、そんなこと。でも、私は夢を現実にしたいの！あなたは夢のままでもいいの？夢を見続ければ、確かに綺麗なままだよ？でも、それで傷つくのは現実のほうがだよ！私はそんなの嫌だ！」

ゆつくりと隣を見ると、海璃は顔を伏せていた。表情は見えない、でもどんな顔なのかは分かる。

「那谷は……、いいの？それで」

涙ぐんだ声、俯いた顔、震える肩。僕はまた、大切なものを壊そうとしている。残酷なまでに、無常なまでに、昔のように。

「海璃……でも」

「やめて、慰めないで。だから聞かせて……。もう嫌だよ……」

「僕は……」

どうしたいんだ？

ボクハドウシタインダ？

頭が痛い、胸が軋む、苦いものが込み上げてくる。でも、逃げちゃ駄目なんだろう。

「一緒に……居たい……」

3年前とは違う答え、偽らざる僕の答え。正しいのだろうか、傷つくと分かった道が。

確かに夢を見続けければ、現実が傷つくのかもしれない。でも、夢をかなえれば何も傷つかないわけではない。夢を失い、現実に挫折する確立のほうが高いかも知れない。

「でも、僕は……」

すぐそこに、崖の在る道を歩もうとしている。

「僕は、長生きできない・・・」  
そう、僕はいつ死んでも不思議では無い。明日とか、そんなにすぐではない。

でも、明らかに僕の命は長くは持たないらしい。僕の体は肺の組織が弱いらしく、あと5年前後で機能しなくなる可能性が高いみたいだ。

手術の成功確立は20%未満、つまり絶体絶命っぽい。

「知ってる、私も覚悟したつもり。那谷が死ぬのはいや！でもそれ以上に、その時私が居ないのはもっといやなの！！」

僕としては、海璃を悲しませるのは同じぐらいにいやだ。世界は僕以上に卑怯だ、残酷だ、そして無常だ。どっちをとっても、海璃は泣く。

前に付き合ってた頃から、彼女は泣き虫だったなあ。

「そっか、そうだよな。でも・・・だからこそ言わなきゃね。僕と付き合ってくれますか？」

男だもんね、言わなくちゃ。

「いつ死ぬかは分かりませんが、あなたよりも長くは生きれないと思います。また、悲しませるようなことを言つかもしれません。それでも、こんな僕でもいいですか？」

僕は海璃のほうを見た、ただ真っ直ぐに。

海璃はその時、ようやく伏せていた顔を上げた。海璃の目には涙が浮かんでおり、赤く充血していた。

それでも、その顔は笑っていた。

とても綺麗に。

「覚悟していても、多分また泣きます。迷惑もかけるし、理不尽なこと言います。酷いことを言うかもしれませんが、辛さに耐え切れないかもしれません。そんな私でもいいですか？」

僕たちは少しの間見つめ合って、そして微笑んだ。少しはにかんだ笑い。

そして、口を開いたのも同時だった。

また会いましょう

『もちろん、よろしく願いします』  
空はすっかり日も暮れて、星と月が浮かんでいた。  
僕たちは急いで準備を済ませて、学校を後にした。  
暗い帰り道、僕たちは離れないように手をつないで歩いた。  
空では星が、流れて消えた。

後日談では在るが、僕は意外と長生きした。あれから5年前後と  
言われていたが、その後10年ちよつとも生きながらえた。

海璃と告白しあつた次の日に、将や凧にもこの事を伝えると2人  
に背中を叩かれた。激励のつもりなんだろう。

当時の彼らには病気のことは言っていなかった、言ったのは高校  
を卒業するちよつと前だ。将と凧は2人で同じ大学に進み、僕と海  
璃も2人で同じ大学に進んだ。

大学を卒業して、僕は作家になった。海璃と一緒に、子供向けの  
本を書いた。

僕たちはそれぞれの道を歩いていった。それでも、僕たち4人は  
その後も頻繁に会つた。

将と凧が結婚した後も、僕と海璃が結婚した後も。それぞれの子  
供が出来た後も、僕たちの中は変わらずだった。

僕らの子供の名前は将が、将の子供の名前は僕が付けた。

僕らの子供の名前は昴、将たちの子供の名前は夢海。

海と空、洒落てるかな？

僕が26歳の6月ごろ、僕と海璃と昴は外でゆつくりと家族団ら  
んをしていた。

この頃既に僕の肺は、限界に達していた。相変わらず、治療の目  
処は立たない。

「もうすぐ夏も終わりますね」

喧嘩もした、挫折もした、傷ついた、後悔もした。

「そうだな、これから秋になって冬になって春になって。そして、

また会いましょう

また夏が戻ってくる」

いろいろなことに僕らは打ちのめされた。

「来年も、こうして星を見ましようね」

それでも、やはり僕は幸せだった。

「そうだな、また見よう」

空はその日のように月と星が輝いていた。

そして、星は流れて消えた。

いくつもいくつも流れて消えた。

僕に来年は結局訪れなかった。

下：再会そして未来へ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。私のHPはhttp://tukiyonoutage.fc2web.comにあるので、興味のある方はぜひ来てください。

「この作品」が気に入ったらクリックしてENTERを押し、投票してください。（月1回）

また会いましょう

また会いましょう

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6201a/>

---

また会いましょう

2009年6月21日23時42分発行